藝える

藝える 第12号

東京藝術大学大学美術館の
仕事と『買上展』。

12

東京藝術大学

東京藝術大学広報誌『藝える』第12号

発行日
2023年3月24日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
山本祐衣（アリヤマデザインストア）
中本ちはる（アリヤマデザインストア）

写真
冨田里美
（表紙、P1、4-5、7-9、10下、11、19、20下、24下）

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里

事務局
東京藝術大学社会連携課

印刷
シナノパブリッシングプレス

※表紙写真の作品は
買上展では展示されません

編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学内　『藝える』編集部
Fax：03-5685-7761
E-mail：toiawase@ml.geidai.ac.jp

藝える

うえる

「藝える」は「　　」と読みます。「買上」は「かいあげ」と読みます。今号は美術館で開催される『買上展』の特集です。藝大では「買上」という言葉は特別の響きをもちます。それは各科が選定した卒業・修了制作の最優秀作品、つまり他大学なら「首席で卒業」といった意味に近いものです。どれもがその時点では頂点ですが、しかし作家としての頂点とは違います。どれも成長の過程であり人生の通過点です。まさにこれから世に出んとする若者の熱き独創の連なりは、未来へつながる本学の歴史そのものです。『買上展』の取材を通して、買上作品という教育研究資料を収蔵する本学美術館が担う特別な役割を明らかにするとともに、美術館の先生方の仕事も少しばかり紹介します。つまり、買上展を通じた美術館特集というのが隠れコンセプト――じっくりお読みください。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01 『買上展』ってなに？

02 レジェンドも、最先端も
『買上展』が問いかけるもの

22 「彼女たち」と買上展
彫刻科・小谷元彦准教授は
なぜ女性作家を選んだのか？

12 独断と偏愛でリコメンド
この逸品に注目！

26 授業SANKAN
ひらけ！ 研究室編
大学院映像研究科アニメーション専攻
伊藤有壱研究室
＋
音楽学部音楽環境創造科プロジェクトアートプロデュース
毛利嘉孝研究室

34 お知らせ



大学美術館本館の収蔵庫扉の漆塗りは、人間国宝の漆芸家である増村紀一郎名誉教授の指揮によるもの。麻布に漆塗りの技法で素地の布目が上品な艶を放つ。

特集

『買上展』ってなに？

藝大には、各科が選んだ卒業・修了制作の優秀作品を
買い上げる制度があります。大学美術館に収蔵されている
歴代の学生制作品は東京美術学校時代を含めて1万件以上にのぼります。
そのうち約100件の作品を厳選して展示する
「『買上展』藝大コレクション展 2023」。
美術館が総力を結集した、その舞台裏に迫ります。

［絵画］横山大観《村童観猿翁》1893年 絹本着色　110.5×180.5cm

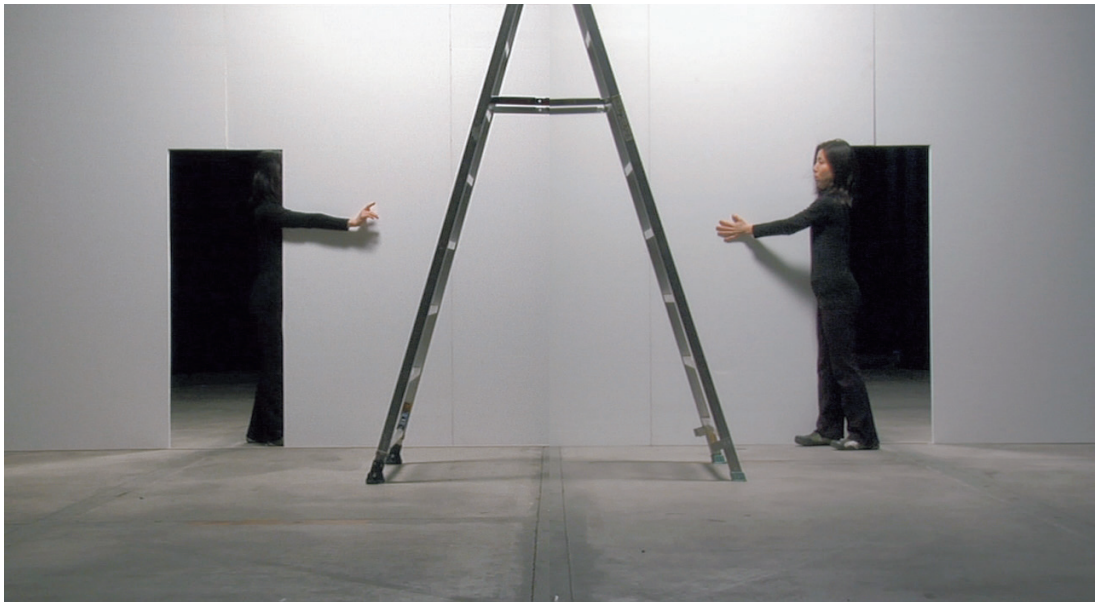


レジェンドも、最先端も

『買上展』が問いかけるもの

明治、大正、昭和のレジェンドたちの若き日の快作と
平成、令和の新鋭による最優秀作が肩を並べる空前絶後の『買上展』。
「カイアゲって、いったい何？」大丈夫、そこから始めます。

文＝大谷道子



［メディア映像］越田乃梨子《壁・部屋・箱 ―破れのなかのできごと》2008年 映像　24分

※［ ］内は当時の専攻名

［グローバルアートプラクティス］山口諒《白昼夢》2020年 映像 フレーム 蚊帳 スクリーン　180.0×200.0×200.0cm





［工芸］丸山智巳《千一夜》1992年 銅 鍛金　181.0×188.0×43.0cm

『買上展』藝大コレクション展 2023
会期：3月31日～5月7日
開館時間：10:00 ～17:00（入館は16:30まで）
休館日：月曜日　※5月1日（月）は開館
会場：東京藝術大学大学美術館 本館（上野）
料金：一般 前売 1100円 当日 1200円
大学生 前売 400円 当日 500円
高校生以下及び18歳未満は無料
※障がい者手帳をお持ちの方（介護者1名を含む）は無料

見よ、この振れ幅を。近代日本画の巨匠にして東京美術学校第1期生の横山大観が描いた世界と、2000年代を疾走する若きアーティストの内なる世界が、芸術への志でつながる藝大渾身の“蔵出し”コレクション展。

想像する。描く。つくる。追究する。藝大という学び舎で積み重ねられる営みのなかで、日々、新しいアート作品が生み出される。

では、それら作品はどこへ行くのか？

それは見た人の心のなかに……という自明はさておき、今回は〝もの〟としての作品のお話。一度かたちになった作品は、処分されるまではこの世に物質として存在し続ける。作者の元に留め置かれるもの、寄贈されるもの、市場で売買されるもの……あり方、行く末はさまざまだが、そのひとつに「美術館に収蔵され、保存、展示される」作品がある。

大学美術館の総力で挑む異色企画

我らが藝大にもあるのですよ、大学美術館。上野校地の本館と昭和4（1929）年竣工の陳列館、日本間のある正木記念館、そして茨城県の取手校地に平成6（1994）年に開館した取手館と、全4館のアートの殿堂。そこには、藝大の前身・東京美術学校が明治20（1887）年に設立される前から蒐集（しゅうしゅう）されてきた3万件以上の作品が収蔵されている。

これらの作品は大学美術館で定期的に行われる藝大コレクション展で展示されているが、この春、本館では大学美術館史上初の規模での大収蔵品展が開催される。題して「『買上展』藝大コレクション展2023」。買上？というと、あの〝お買い上げ〟と関係がありますか？

「まさにその〝買い上げ〟ですね。戦後、藝大が卒業、修了制作の最優秀作品を買い上げて収蔵してきたのが買い上げ制度。今回の展覧会では、1万件を超える作品群のなかから約100件を展示します」

そう答えたのは、本展覧会の企画者である大学美術館の古田亮教授。近代日本美術史を専門に、『琳派ＲＩＭＰＡ』（東京国立近代美術館・04年）、『揺らぐ近代』（同・07年）などのクラシック&フォーマルな展覧会はもちろん、「夏目漱石」「幽霊」「香り」といったユニークな切り口の展覧会を世に送り出してきた敏腕キュレーターである。取材時は開幕までおよそひと月半というタイミング、観客を魅了する展示がさぞ着々と……と思いきや、その貌（かお）にはなんとなく苦悶の色が。

「最初は各科から1点ほど作品を選んで『買い上げって制度があるんですよ』という紹介を、くらいの話だったのが、学内から意外なほどの強い強い期待を受けまして、それに応えないわけにはいかなくなり……」

教授の苦悶の正体を探る前に、まずは大学美術館のコレクションの歴史と「買上」につ



大学美術館教授

古田亮 ふるた・りょう

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、美術研究科芸術学博士課程中退。東京国立博物館、東京国立近代美術館勤務を経て大学美術館勤務、2021年より現職。サントリー学芸賞を受賞した『俵屋宗達　琳派の祖の真実』など著書多数。博物館学課程の科目に加え、美術学部で「日本美術史特講・演習Ⅱ」の講義を担当。

いておさらいしておこう。日本画、木彫、彫金、漆工の4つの領域でスタートした東京美術学校が最初の卒業生を送り出したのは、130年前の明治26（1893）年。第1期生にはのちに日本画の大家となる横山大観、下村観山など錚々たるメンバーが名を連ねたが、明治期からしばらくの卒業生の作品は、すべてが美術館の前身である文庫（組織的には図書館の一部）に収蔵されていたという。

しかし、時代が進むにつれ西洋画科、図案科、塑造科（のちに木彫科と合体）と新科が増設され生徒数が増加。当然、収蔵作品の数も増えていく。その影響からか、日本画科は大正3（1914）年の卒業生以降は、選抜された優秀作のみが収蔵されるようになった。

これが買い上げ制度の原型で、現在は日本画、油画、彫刻、工芸、デザイン、建築、先端芸術表現、美術教育、文化財保存学など学部・修士課程全12科の作品が買い上げの対象に。平成28（2016）年開設のグローバルアートプラクティス専攻（GAP）からも作品が買い上げられており、ほかにも大学院映像研究科メディア映像専攻、さらには音楽学部作曲科の優秀作品の楽譜も……と実に幅広い。

ところで、「買上」と呼ぶからには、作者には代金も支払われる。作品の大小、形状にかかわらず、30万円。物価変動による価格の変更はなし。これを妥当と取るか安いと取るかは見解が分かれるかもしれないが、美術館に収蔵されるということは、作品が公共物となり美術史の一部になるということ。半永久的に保存され、後の世の多くの人々に鑑賞される機会を得ることを思えば、腑に落ちようか。

ちなみに、一度買い上げられた作品は作者であっても「家に飾りたい」などの理由で取り戻すことは不可。また、藝大出身のアーティストの略歴に「○年度買上賞」という記述がたびたび見られるが、買上賞という賞自体は存在せず、作者には卒業・修了式の席上、買上作品認定書が授与される。

藝大の歴史と中身をさらけ出す
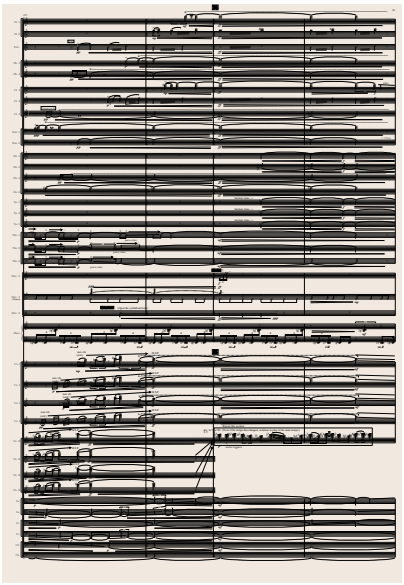
説明が長くなったが、とにかくこの買い上げ作品を過去類を見ない点数で蔵出しするのが、今回の展覧会。内容は2部構成で、第1部は日本美術界を牽引した巨匠たちのデビュー作から古田教授が名品をセレクト。日本画は大観をはじめ菱田春草（→12ページ）、小村雪岱、東山魁夷、西洋画からは和田英作、青木繁、藤田嗣治、彫刻は朝倉文夫、高村光太郎などなど、美術史上の大スター作が勢ぞろい。第2部では、戦後の藝大で買い上げら



大学美術館館長／教授

黒川廣子 くろかわ・ひろこ

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、美術研究科工芸教育修了。東京国立博物館を経て大学美術館勤務、2016年に教授、21年より館長を務める。手がけた企画展に『工芸の世紀』（東京藝術大学大学美術館・03年）、『皇室の彩』（同・17年）などがある。美術学部では「日本金工史（I・II）」などの講義を担当。



［作曲］網守将平《Multilubricity》2014年 楽譜



［油画］櫃田伸也《ひとたち》1964年 キャンバス 油彩　144.7×144.7cm



［日本画］梅原幸雄《遠い記憶》1978年 紙本着色　181.0×226.8cm



［建築］横須賀洋平《metamorphosis ～可変トラス構造体～》
2006年 デジタルデータ 紙 丁番 模型　サイズ可変



［文化財保存学］林功《羅漢図模写》
1971年 絹本着色　127.5×53.8cm

れた作品群から各科が独自に選んだ全52作品が一堂に会する。ラインナップを見るだけでも期待は高まるが、「当初は展示のゴールをまったくイメージできなかった」と古田教授。「なぜなら、誤解を恐れずに言うと、これは僕の展覧会じゃないから。通常は作品を選び、どんな作品をどういう順序で並べて見てもらうか、その物語をつくって構成するのが学芸員の仕事。でも買上展の場合、とくに第2部は、各科の先生方がそれぞれの方針によってキュレーションする、あくまで藝大としての展覧会です。何が出てくるかわからないし、各科の協力がなければ展示プランも進められない……これはもう、僕の想像を超えた世界」

収蔵されている1万件以上の買い上げ作品は、形状も種類もさまざまで、近年はインスタレーション、映像なども。共通するのは「買い上げられた作品である」ことのみだ。

「作者のほとんどが、制作時は20代でしょう。それだけでも非常に特異な切り口だし、大学として選んだ作品を表に出すということは、いったい藝大は何を教えてきたのか?ということを問われ、さらけ出すことでもある。深く考えてみれば、恐ろしい展覧会ですよ。でも、明治20年代から続けてきた買い上げを伝統と呼ぶ以上、その価値を自覚して次の時代につなげていくのが我々の使命。やってみてわかることはたくさんあると思います」

収蔵作品は複数の収蔵庫に点在。しかも、ものによっては巻いて包んでしまわれているものを伸ばして展示できる状態にしなくてはならない。さらに、なかには収蔵されてから一度も展示されたことのない作品もあるので、その状態を確認し、必要な修理や修復を施して展示に備える……さまざまな作品と向き合っての膨大な作業に、古田教授含む4人の教授陣とスタッフが「かつてない総動員体制」で臨んでいるという。

本物に宿る若さと情熱に触れる喜び

「第2部にはご存命の作家の方も多いので、ご自身の作品をどう見せるか……一生懸命取り組んだ部分をどのように表すか、遠近感を出すにはどうしたらいいかなど、いろいろなオーダーがありますよね。でも、その分だけ、皆さんが期待していらっしゃることも強く感じるので、これはもう、一つ一つ粘り強く対応していくしかないと思います」

そう語るのは、大学美術館の館長である黒川廣子教授。取り込み中にもかかわらず、ぜひ作品の収蔵状況を拝見したい……!という取材チームのムチャなお願い、叶えていただ



大学美術館准教授

熊澤弘 くまざわ・ひろし

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、美術研究科西洋美術史修了。美術学部助手、大学美術館助教などを経て2017年より現職。『線の巨匠たち』(東京藝術大学大学美術館・08年)などの企画展、コレクション展を数々手がける。授業では博物館学課程の各科目、実習を担当。最近の著書に『脳から見るミュージアム　アートは人を耕す』(中野信子共著)などがある。

きました。上野の本館の奥深くにある収蔵庫（通常は取材・撮影謝絶）フロアにエレベーターで着くと、その奥には巨大な扉が。まるでテレビドラマで見る銀行の金庫の巨大版だが、分厚い金属製の扉に漆の意匠（装飾）が施されているという粋な仕掛けも（1ページ参照）。外気に含まれる埃などの異物をできる限り避けるため、まずはエレベーターの扉を閉めてから扉前のスペースで靴を履き替え、スタンバイ。その後、扉が開かれる。キーン、と軽い耳鳴りを感じるのは気圧の差から？まるでタイムマシンに乗りこむ気分だ。

そして、足を踏み入れたそこは、まさに異次元の空間だった。隙なく梱包され棚に収まる作品、作品、作品！「これが昨日、取手館から着いたものです」と館長が指すスペースには、絵画や立像らしき展示予定作品の一群が。時の色をたっぷりと吸ったダンボールや木箱には、収蔵時に作者が書いたらしい文字やサインが見て取れる。「これも出品作のひとつ。開けてみましょうか」と黒川館長。古びた木箱を開き、包みを解くと、明治時代につくられた作品が、塗り上げられたばかりのような艶（あで）やかさで姿を現す。うわぁ、と思わず手を叩いてしまう（埃、埃！）が、「やっぱり実物はいいでしょう？」と、館長も満面の笑みである。

「学芸員としてこうして作品一つ一つに当たる（触れる）のは、やっぱりうれしいこと。学芸員になってある程度のキャリアを積んだ先輩たちは、口をそろえて『作品に当たる機会が少なくなって寂しい』と。大変な作業ではあっても、やっぱり作品を近くで見られることは、何物にも代えがたい喜びですね」

時を経て変化することに価値がある

取手館の収蔵庫を案内してくれたのは、熊澤弘准教授。ここで圧倒されたのは、スライド式の大型ラックに収められた絵画作品。ゆっくり引き出すと……おお、おお。額装された作品から、絵の具の鮮やかさや描線の勢い、作者の手の痕跡までもがありありと浮かぶ。

熊澤准教授の専門はヨーロッパ近世・近代美術。今展覧会で展示を担当するのは、GAPとメディア映像、作曲の各作品で、普段は直に接することのないタイプの作品の取り扱いに、日々奮闘中だという。

「難しいですよ。『トランスミッター（データ送信に用いる装置）って何？』とかね。他の美術館であれば、ヨーロッパ美術専門なら基本的にはその関連のコレクションと企画、調査研究を担当しますが、ここは大学美術館。藝大の幅が広がるにつれ、作品もどんどん多



大学美術館准教授

村上敬 むらかみ・たかし

大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻修了、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻博士課程満期退学。香川県文化会館、静岡県立美術館勤務を経て現職。企画展に『ロボットと美術』(10年)、『めがねと旅する美術展』(18年)、『富野由悠季の世界』(19～21年)など。博物館学課程の各科目、実習を担当。

様で国際的になっている。そうした状況に置かれていることが、大変ではありますが面白い。作者や各学科の先生方と調整しながら学ぶことは、実にたくさんあります」

　2021年から大学美術館に加わった村上敬准教授は建築、デザイン、美術教育の3科の作品を担当。公立美術館で学芸員をしてきた村上准教授が実感するのは、やはり学生作品を収蔵する大学美術館の独自性だという。

「公立美術館の場合は、まず美術館建設準備室ができて、その後、収集委員会が立ち上がり、たとえばその地に縁がある作家の作品だとか、現代美術の動向はどうかといったことを考えながら作品が選ばれます。つまり、収蔵された時点で作品のある程度の評価は定まっていますが、ここの場合は、教育的観点で収蔵したものが時を経て巨匠の若き日の作品に変化したりする。そこが藝大の大学美術館のユニークネスであり、魅力だと思います」

　確かに、いかにその年の最優秀作であったとしても、作品をつくりあげた時点で、作者たちはまだ何者でもない。なかには、その作品を最後に創作から離れた人もいるだろう。評価の定まらない作家の作品を長く、丹念に収蔵し続けることの意味とは？『買上展』は、その問いに答えてくれるのだろうか。

「東京美術学校で始まった蒐集は、もともととても気長なものだったのかもしれません。それに、教育の場は、学生と先生でできている。藝大という場所があるから作品が生まれるのではなく、そこに誰がいて、どんな教育や研究が行われるかによって変わっていくんです。そういうことを、買い上げ作品という〝もの〟が、きっと語ってくれるはず。学生は学生で感じるだろうし、同時に、教えてきた側も、そこから気づかなきゃいけないことがたくさんあるんじゃないかと……。そして、できればそれが身内で完結しないようにしたいですね。入場料を払って見ていただくわけ

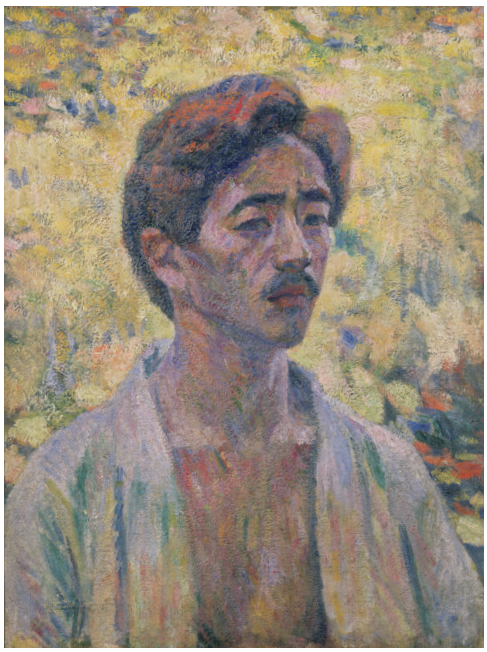




「もちろん、主役は作品。でも作品を開かせる手がなければ、主役は表には出られないんです」と古田教授。そのため、欧米諸国では所蔵品管理専門職員の地位が確立されているのだとか。作品を取り出し、展示し、しまう。伝統と価値を未来に確実に伝えるための、丁寧な作業が重ねられる。



青木繁《自画像》1904年 キャンバス 油彩　60.6×45.5cm



萬鉄五郎《自画像》1912年 キャンバス 油彩　60.6×45.5cm



取手収蔵庫の一角を占めるのは、明治期から卒業・修了制作とともに描かれた学生たちの自画像。戦時中の一時期を除いた西洋画と油画のほぼ全員分が収められており、年代順に並べると日本洋画史のトレンドが明らかに。『買上展』第Ⅰ部でも複数点が公開される。

ですから、観客の満足に見合っているかどうかを、僕たちは常に考えなくてはならない」

すべては作品を「生かす」ために

そして、初の買上展が開催される今年は、藝大と大学美術館にとって買い上げを巡る新時代の始まる年となる。これまで、各科で買い上げ作品に選定された作品は自動的に美術館に収蔵されてきたが、2022年度からは作品をいったん大学が買い上げ、そのうえで各科が作品を収蔵するかどうかをあらためて美術館に申請するという手続きが設けられたのだ。「小さな変化のようだけれども、これは大きな変化への一歩」と古田教授は言う。

「つまりは、美術館に収蔵しないという選択肢が出たわけです。現実的には、まず現在の収蔵庫がいっぱいになっているという問題がある。今、取手に新しい収蔵庫を建てていますが、それも計画的に使わなければ、いつかはまたあふれてしまいますから」

さらに、素材的に長期保存に適さない作品をいかに管理するかという実務的な問題も存在すると、黒川館長。

「たとえば、長期の保存が難しい素材でつくられた作品を収蔵していつまで保たせるか？　もちろん作品は美術館に収蔵することを目的につくるわけではないので、設計図的なもので残すとか、素材を他のものに置き換えるとか……作品はすべてがオリジナルですから、毎回、新しい状況にどう対応するかが知恵の絞りどころです」

残せるものなら、すべての作品を残したい。それは明治から現在まで、この特異な性格を持つ美術館に関わる人々の一致した思いだろう。しかし、作品にとっては決して収蔵されることがゴールではないということも、忘れてはならない点だと、古田教授は指摘する。

「収蔵されたはいいけれど、木枠に押し込まれて誰からのリクエストもなく、二度と日の目を見ないことが、果たして本当にいいことなのか？　この機会に、作者も大学も我々もよく考えたほうがいいと思うんです。作品の本当の生かし方について」

作品が真に生きること――それは、できるだけ多くの人の目に触れ、その人生に関わること。それはアーティストの願いであり、アーティストを育てる大学の、美術館の願いでもあるはずだ。「だから、学生も含めて、多くの方に見に来ていただきたい」という大学美術館の教授陣からの切なる声を、最後に、あらためてお届けする。展覧会が終われば、作品は収蔵庫へ戻る。その扉がふたたび開かれるかどうかは、あなたにかかっているのだ。



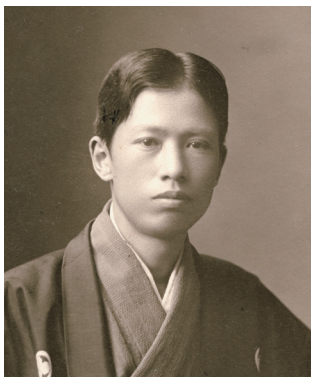


大学美術館本館（写真上）と同・取手館（下）はともに、美術学部長を務めた建築家・六角鬼丈の設計。取手館の隣に令和５年度内竣工予定の新収蔵庫のコンセプトは、収蔵された状態で作品鑑賞ができる“魅せる”収蔵庫に。より来館者に開かれたものになるという。

独断と偏愛でリコメンド

この逸品に注目！

秀作がそろう『買上展』。なかでも、とくに見逃せない作品はどれ？第1部からは大学美術館の教授陣がとくに推すレジェンド作を、第2部からは編集部が注目する作品をご紹介します。



菱田春草　ひしだ・しゅんそう

1874（明治7）年長野県生まれ。岡倉天心、橋本雅邦に師事し、東京美術学校卒業ののち、日本美術院創立に参加。代表作に《王昭君図》《落葉》《黒き猫》など。1911（明治44）年没。

伝わってくるのは、不安と怯え、そして忍び寄る不穏な運命に抗えないことを予感した者の絶望と諦観――向き合うと、画面からあふれ出る豊かな物語性に圧倒される。

東京美術学校の2期生にして、のちに日本画壇の旗手となる菱田春草の卒業制作《寡婦と孤児》は、軍記物の古典『太平記』をもとに描かれたとされる作品。歴史上の出来事やそれを描いた物語を主題にした歴史画は、東京美術学校開設当時、新しい日本画を模索する上での課題と位置づけられていたという。

しかし、勇壮な戦絵巻ではなく、春草が描いたのは戦に敗れた武士の妻子という銃後の存在。古田亮教授は、そこにこの絵の意義と春草独自の視点があると語る。

「今、これを描く」意志と眼差し

「歴史画を描くには歴史の勉強も大事だし、写生も大事。しかし、もっとも重要なのは『何を表現するか』。取り上げた事件や物語を今描くということは、いったいどういうことなのか……それを、岡倉天心をはじめとする教授方は考えさせたんでしょう。そうして、春草は女性と子どもの姿を描いた。彼は彼なりに考え、そういう答えを出したんです」

異色の歴史画の背景には、描かれた時代の空気が影響していると古田教授は推測する。当時の日本は、日清戦争の最中。国土が戦場にこそならないものの、出征した兵士の家族がそこかしこにいて、その消息が聞かれた時代である。だからこそ、表面的な勇ましさを描くのではなく、戦に巻き込まれる者の悲劇と争いが引き起こす負の連鎖を描いたのでは、と古田教授。時節に流されず、人のありさまを冷徹に捉えたひとりの画学生の眼差しが、哀切さで胸揺さぶる絵の根幹にある。

「ある意味では、反戦画ですよね。そして、軍備拡張にひた走った時代の空気は、我々のいる現代に通じるところがある。だからこそ、今、紹介する意味があるのではないかと」

卒業ののち、春草は朦朧体と呼ばれる実験的画法を導入するなど常に自作に新しい風を吹き込みながら数々の傑作を残し、36年の生涯を駆け抜ける。なよやかで優美な絵の奥に宿る、揺るぎない意志。この時点で、すでに大家の品格を備えていたのだ。

文＝大谷道子

古田亮教授の
おすすめ

菱田春草《寡婦と孤児》

1895年　絹本着色　135.9×84.1cm



熊澤弘准教授のおすすめ

金観鎬《夕ぐれ》

1916年　キャンバス 油彩　127.0×128.0cm



＊参考文献＝吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究　東京美術学校留学生史料』ゆまに書房 2009年刊

現在、30カ国あまりの国と地域から250人を超える留学生が学ぶ藝大。国際化の流れは、東京美術学校時代からすでに始まっていた。中国、朝鮮、台湾を中心とする東アジア各国から日本へ西洋美術を学びに来ていた学生たち。彼らが残した作品のなかで熊澤弘准教授がとくに思い入れを持つ一作が、朝鮮からの留学生・金観鎬の《夕ぐれ》。大正5（1916）年に当時の西洋画科選科を首席で卒業した若き洋画家の作品は、もちろん買い上げの栄誉に輝いた。



金観鎬 キム・グァンホ

1891年平安南道平壌郡に生まれる。18歳で来日、明治学院に学んだのち東京美術学校西洋画科選科に入学。卒業後は祖国に戻り絵画研究所を創立するが、のちに画業から離れる。1959年没。

「今、韓国近代美術史が国内外で見直されるなかで、日本との美術交流についても注目が集まっています。東京美術学校や藝大に学んだことは彼らのアイデンティティの一部になっていて、《夕ぐれ》はそのメルクマールとなる一作。今年2月まではロサンゼルス・カウンティ美術館で行われた韓国モダンアート展に貸し出していましたが、BTSのRMがオーディオガイドを務めるなど、注目度も高い回顧展でした」

収蔵され、美術史の一部になる

故郷の平壌（現・北朝鮮）で描きはじめたと伝わる本作。背中を向けているとはいえ、裸体の女性が屋外に佇むという構図は、当時はなかなかに衝撃的なものであったらしい。〈モデルは無し、光線が気に入らず想像で描きました〉と当時の新聞に語った金は、黒田清輝、久米桂一郎らの白馬会にも学んでおり、明るい外気を画面に取り込もうという積極的な意思が伝わってくる。

「現在の学生たちもそうですが、言語と文化の枠を乗り越えて飛び込んできた力強さには、驚くべきものがあります」と熊澤准教授。本作は文展（文部省美術展覧会）で特選にも輝き、文字通り、時代を画する作品となった。

「今の目から見れば、いかにも明治、大正初期の古めかしい洋画という感じがするかもしれません。しかし、20世紀、21世紀と時間を経てきたなかで東アジアの近代美術史のマイルストーンとなったという点は、やはり特筆すべきでしょう」

美術館に収蔵された作品は、作者よりも長い時間を生きることになる。そしてその位置づけや価値が時代に連れて変化する——これは、すべての買い上げ作品がはらむ可能性だ。

「現在の学生たちの作品も、いつかは歴史史料に……その行く末を見守りたいですね」

文＝大谷道子

黒川廣子館長の
おすすめ

六角大壌《紅葉図棚》

1937年　木製漆塗 卵殻 螺鈿など　50.0×99.0×36.9cm





六角大壌　ろっかく・だいじょう

1913（大正２）年東京（市）生まれ。東京美術学校を卒業後、漆芸家として数々の作品を制作。また47年からは教員となり、東京藝術大学開設以降も多くの漆芸家を指導、育成した。73年没。

ある作品との出会いが人生を変える――そんな幸運が待っている（かもしれない）美術館。しかもその作品が、作家の人生を大きく動かしたものだったら？　工芸の研究者である黒川廣子館長が推すのは、まさにそんな一作。作品の入った木箱の署名には「田中穎雄」とある。

「写生する滝を探して栃木県の日光まで歩いて行ったという逸話が、まず、すごいですよね。日光といえば真っ先に華厳の滝を思い浮かべますが、そこまで行くと日が暮れてしまうので、東照宮近くの滝を選んだと伝わっています」

扉のある正面には、滔滔と流れ落ちる大滝。横に、その支流らしき流れが見られるが、棚の側面にはさらに細く繊細な滝の流れが幾筋も。滝に魅せられ、疲れも忘れて写生に励んだ様子がうかがえる。

「構図は相当練られています。水の飛沫を表すのに当初は銀を使おうとしたものの、実際の滝を見て、これは銀では表せないといって卵殻に変更したそうです。しかも、蒔くのではなく、一つ一つ置いている。セキレイの目は螺鈿、紅葉の葉にも一枚一枚濃淡をつけて遠近感を出すなど、実に丹念な仕事です」



実物が呼び起こす、別次元の感動

棚本体も自作。外側を仕上げた時点で時間と根気と予算が尽きたのか、扉の中は簡略な仕上げのみというのも、学生作品らしい。

「技術や道具も乏しいなかで、相当頑張ったと思いますよ（笑）。当時は学校につくる場所がなかったので、教授たちが生徒の自宅まで足を運んで指導をしたこともあったそうです」

労作の完成度に対する評価は高く、作品は買い上げに。さらに、東京美術学校の第1期卒業生で当時漆芸科の教授を務めていた六角紫水は、作者の並々ならぬ才能を見込んで彼を養子に迎えた。これが漆芸家・六角大壌の出発の物語。さらに、この大壌の長男が建築家・六角鬼丈であり、つまり大壌の出世作は、のちに息子が建てた美術館に収蔵されることになったのである。運命の連鎖、その原点がひとつの作品の創作だったという人の世の妙。ぜひ会場で見てほしいと、黒川館長は言う。

「どれだけ高精細画像になったとしても、それとは次元の異なる感動が実物にはあるはず。きっと実感していただけると思います」

文＝大谷道子

作家に
インタビュー

タナカノリユキ

《PAINTING SCULPTURES 1985（Planet Landscape）》

1985年　板紙 アクリル絵具 シルクスクリーン コラージュ　103.0×291.3cm（上の部分）









タナカノリユキ氏の学生時代、デザイン科の教員や非常勤講師には、福田繁雄のほか、佐藤晃一、有元利夫など、現役で活躍するデザイナーや画家たちがいた。

「視覚伝達デザインを専攻した3年の時から、国内外で活躍する著名なデザイナーや画家の方々が先生になって、教室の空気がガラッと変わったんです。なんというか……先生という感じではなく、プロフェッショナルな厳しさが、いきなり教室にやってきた感じでした。まあ、僕も相当生意気な学生だったんでしょうね。そういった方々に『学内での相対評価ではなく、今すぐプロとしてやっていけるかどうかの絶対評価で講評してほしい！』とお願いしたんです。

そうしたら、大変。完全なプロ仕様になって、『この作品は全然ダメ！　オリジナリティがない！　自分の全てを見せてみろ！』とむちゃくちゃ叩かれた。そこから、自分の表現とは何か？　オリジナリティとは何か？と毎日悩みながら、とにかくつくりつづけました」

※4点のうち下の3点は買上展では展示されません

つくることでしかこの先はない。大学院に進んだのも、自分の表現が見えるまで創作したかったからだという。学校に行かずにアパートにこもってひたすらつくり続けた作品群を大学院の前期の講評会に出したところ、厳しかった教員陣が皆一斉に褒めてくれ、面白がってくれた。

「福田先生が『いままで、世界中で様々なアートやデザインの審査をしてきたが、このような表現は見たことがない。だからこのまま、つくりつづけなさい』と言ってくれて……。すごく勇気をもらったのを、今でも覚えています。そして、そのいくつかの作品を公募展に出品したら、賞をもらったんです」



タナカノリユキ

1959（昭和 34）年東京都生まれ。在学中に、第 5回日本グラフィック展奨励賞、第 3回 JACA 展グランプリを受賞。大学院修了後、クリエイティブディレクターとして国内外で活動を展開。

自分の表現の核を生み出す

1年上の日比野克彦とタナカ氏は在学中に日本グラフィック展などの公募展で受賞し、デザイン界に藝大旋風を巻き起こしていた。

「日比野さんと僕は在学中からいろいろな仕事をしていました。当時は携帯電話がなく、印刷会社やデザイン会社から描画系の教員だった大藪雅孝さんの研究室に電話が入って、大藪さんから『俺はお前らのアシスタントじゃねぇからな!!』と怒られたりして（笑）」

当時、藝大デザイン科のグラフィック系と描画（絵画）系の学生の目標は、まず就職せずにフリーのアーティストになること。2番目が資生堂などのメーカーの宣伝部、3番目が広告代理店、4番目が予備校講師などをしながら創作活動を続けることだったという。

「プロの視点から厳しく徹底的に否定されることで、社会に出る前に目的や機能性から離れて、自身の造形の根源となる表現をゼロから生み出す良い機会になったと思います。『自己とは何か』を巡って悩む自分に、がっつり向き合ってくれる友人や教員の存在、『デザインとは何か』など哲学としてのデザインをめぐる議論ができたこと。そして自分自身の表現の核を生み出せたこと。それが藝大での貴重な体験でした」

今の制作につながる修了作品

『買上展』では横長の1点だけが展示されるが、本作は本来、4点組の作品だった。

「展示スペースを目いっぱい使いたくて4点で構成したんです。近代以降、絵画は絵と主題を切り離してきたけれど、絵画の主題は常に存在するはずだと考えていて。伊藤若冲や葛飾北斎などの日本絵画と、モネやゴッホなどの西洋絵画の歴史を融合させ、視覚伝達デザイン専攻のポップ・アートとして、抽象的でありながら具象的なモチーフを取り入れた作品を描いてみたかった。最近、コロナ禍で人知を超えた自然の力をあらためて感じ、現在の『自然と人のダイアローグ』について再考してみたくて、また絵画を制作しています」

タナカ氏の内に秘められた絵画への思い。今回の『買上展』は、そのルーツに触れられる絶好の機会となるだろう。

文＝藤原えりみ

作家に
インタビュー

荒神明香《reflectwo》

2006-07年　造花の花弁 塩化ビニール板 テグス　300.0×972.0×240.0cm



「子どものころから身近な風景に違和感を覚えることが多くて。それが創作の根源にあります」と荒神明香氏は言う。

「小学校の5階の教室から外を眺めていたとき、何もないように見えるのに空間に何かが詰まっているような感じがして、トイレットペーパーを投げてみたら空気の中の何かに触れるようにひらひらと落ちていく。やっぱり何か変だ！と、友だちと何度も実験していたら先生に怒られて母親が呼び出される事態に（笑）。でも母がこう言ったんです。『大人になると忘れてしまう感覚だから、大切にしてね。この感覚を覚えていたほうが良いよ』と」



荒神明香　こうじん・はるか

1983年広島県生まれ。先端芸術表現科修士課程修了。風景に対する違和感を身近な素材で作品化する。2012年、南川憲二、増井宏文とともに現代アートチーム「目 [mé]」を結成。

その感覚を忘れないために、荒神氏は気になる風景を写真撮影するようになっていった。

現代美術との衝撃的な出会い

中学3年生のとき、広島市現代美術館開催の『リアル／ライフ イギリスの新しい美術』展で、初めて現代美術作品に触れる。

「若手作家に焦点を当てた展覧会で、こんなことやって生きている人たちがいたんだ！と、自分の感覚に似た何かを感じて。美術予備校に通っていた高校生のとき、先生から藝大には先端芸術表現科という科があるよと、川俣正さんが表紙の『美術手帖』を渡されました」

それを機に先端芸術表現科に進学。1・2年生時はゼミ所属がないにもかかわらず、川俣研究室に通い、川俣プロジェクトの手伝いにも参加していた。だが3年生になるとき、川俣は藝大を辞めてしまう。そして学部時代は木幡和枝ゼミ、大学院では、卒業制作時から指導を受けていた小谷元彦ゼミに所属する。

利根川の風景から生まれた修了作品

取手市に住んでいた荒神氏は利根川の河辺を散歩していて、深夜2時頃に川の流れが止まる現象に気づく。鏡面のような川面に、対岸の風景や天空の星まで反転して映りこむ。

「まるで風景が宙に浮いているように見えて、めちゃくちゃ怖いんですけど、すごく面白くて。この感覚をなんとか作品にしたくていろいろ試して、行き着いたのが造花の花びら。造花を解体していくと、合わせ鏡のように左右の掌を合わせた形になるんです。利根川で見た景色を、有機的な形と対称性を持つ花弁の集積に置き換えてみようと」

買い上げ作品となった《reflectwo》は美術界で高い評価を受け、彼女はアーティストとして順調にキャリアを積み重ねていった。だが、次第に同じ手法で制作し続けることに疑念を抱くようになる。

チーム「目［mé］」の結成へ

そのころ、大学院の同級生であった南川憲二が「チームをつくらないか」と声をかけてきた。だが、荒神氏は約1年半も逡巡する。

「彼は彼でwah document（ワウ ドキュメント）というユニットで面白い活動を国内外で展開して活躍しているのに、なぜわざわざ自分に声をかけるんだろうと。警戒心もあったし、キャラ的にも関西弁で……多分合わないなと（笑）」

そんな彼女が彼の提案を受け入れるきっかけになったのは東日本大震災だった。

「被災地でwah documentと一緒に活動したとき、突然世界が終わるとしたら、1人で制作していてはとても間に合わないと思いました」

荒神氏の頭の中にある違和感や夢で見た光景を、ディレクターとして南川が言説化し、インストーラーとして増井宏文が実現化する。「目［mé］」の結成以降、作品の規模もテーマも広がり、今秋開催されるさいたま国際芸術祭ではディレクターを務めることになった。

「想像以上に大変で。南川も言ってるんですが、芸術祭などでむちゃくちゃわがままを言ってきた私たちへの罰じゃないかと（笑）」

買い上げが決まったとき、「こんなチープな素材で大丈夫？」と不安になったという。16年ぶりに紐解かれる、彼女の原点が詰まった《reflectwo》。その背景を知ったあなたの目には、一体どんなふうに映るだろうか。

文＝藤原えりみ



山口信子《習作》1952年 石膏 高さ85.7cm

「彼女たち」と買上展

彫刻科・小谷元彦准教授はなぜ女性作家を選んだのか?

各科が独自の観点で過去の買い上げ作品から選び、展示する『買上展』第2部。彫刻科が示した作品選択の方針は女性作家の作品を古い順から5点、という明快なものだった。何を思い、そう決めたのか。提案者の小谷准教授に尋ねた。

文=大谷道子

3体の人体像と、2つの木彫。今回の『買上展』に彫刻科が選んだ作品である。もっとも古いものは1952(昭和27)年買い上げ。以降、順に並べると、59年、63年、64年。73年作の立像がもっとも新しく、大学美術館に収蔵されてからちょうど半世紀の時を経た計算になる。

美術学部のなかでもっとも古い歴史を持つ科の出品作選びの基準は、ごくシンプルだった。「古い時代の女性作家から時系列に沿って順番に」。発案者は小谷元彦准教授である。「学科のなかで自分がセレクトをすることが決まり、反射的に決めました。他の学科の選んだ作品を見たら、歴史を定点観測して選ば

れていた印象だったので、『あれ、違うやり方してしまったかな?』と思ったんですけど」

迷いのないチョイスは、いかにも天才肌らしい——とつい思ってしまうが、その決断の足元には、小谷准教授が抱いていた彫刻の世界、および藝大彫刻科の成り立ちや歴史についての疑問と問題意識が横たわっていた。

客観性と熱を併せ持った作品

「もともと彫刻家には男性が多くて、近代彫刻史に出てくる名前も男性ばかり。僕自身は学生時代、レベッカ・ホーンやエヴァ・ヘスの作品が好きで女性作家の切り口には興味を持っていたので、藝大の彫刻科にはいつから、どのくらい女性がいたんだろう?ということが、以前からずっと気になっていたんです。だったら、この機会に調べてみようと」

彫刻科の歴史は、1887(明治20)年の東京美術学校設立と同時に始まる。最初は木彫、その後に塑造が加わって統合され、戦後の1949(昭和24)年の大学組織後、現在の彫刻科に再編された。

女性の受け入れが始まったのは、東京美術学校時代の46(昭和21)年。だが、大学美術館の古田亮教授を介した調査では、それから3年間の入学者数の内訳については記録が見つからなかった。藝大となって最初の49年には22名の彫刻科新入生のうち女性が3名、翌50年は26名中4名、51年は33名中2名。49年からの10年間の彫刻科234名の全入学者中では32名で、全体の13・6パーセントを占めている。女性作品初の買い上げ作《習作》をつくった山口信子が入学したのは、東京美術学校時代の最後の年あたりと推測される。

「実物を見る前に写真で見て、『あ、いい』と思いました。いわゆる近代彫刻史に出てくる作品とも少し違っているし。この頃であれば、技術的につくり込んだりするんだろうけど、あまり具象的でなく、当時新しかった石膏の直付けという手法を使った、粘り強い作業プロセスを感じる。女性像としても、匿名性が強い感じが興味深い」

確かに、それに続く日高頼子の《女》、鷲崎直子の《立像》にも、具象的というよりは、ど



石澤ミヨ《芽》1959年 木 高さ35.5cm



日髙頼子《女》1963年 ポリエステル樹脂
高さ131.8cm



水谷たき《作品Ⅰ》1964年 木 高さ87.5cm



池田カオル《問》1970年 石（多胡石）
高さ160.0cm ※本作は買上展では展示されません

こか人体、ことに女性の姿を客観視する冷静な視線が感じられる。対して、木彫の2作品、石澤ミヨの《芽》、水谷たきの《作品Ⅰ》は、素朴な佇まいながら、静かな情熱が伝わってくるようだ。

「彫刻というと、重たくて大きなものを扱うのだから力のある男性のほうが有利なのでは？と考える方が多いと思いますが、これには誤解も多分にあって。要は体の使い方で、要領さえよければハンデはないと思います。逆に力があればあるほど、その力を無駄に使ってしまう場合もあります」

初期女性作家の作品の共通点を尋ねると、

「どれも、すごく制作への熱を感じます。きれいに整えることよりも、時間をかけて素材と向き合っている雰囲気からも」と小谷准教授。美術界でも、学校内でも、まだ女性が圧倒的にマイノリティであった時代、何を思い、どのように制作に打ち込んでいたのか——彼女たちの在学中のライフストーリーは、残念ながら母校にはあまり伝わっていない。

「美術史家の木下直之さんの本によると、藝大の彫刻科の最初の入学試験では定員割れだったらしいんです。彫刻とはいったい何なのか、そのことをまだ誰もわかっていなくて、謎多き芸術だったのでしょう。そんな時代で、さらに男性が圧倒的に多い環境に飛び込んできたわけだから、かたい決心があったんだろうなと想像します。でも、彫刻家を目指すこと自体が困難だった時代であっても、こうして作品をつくり、結果を残したことは確かですね」

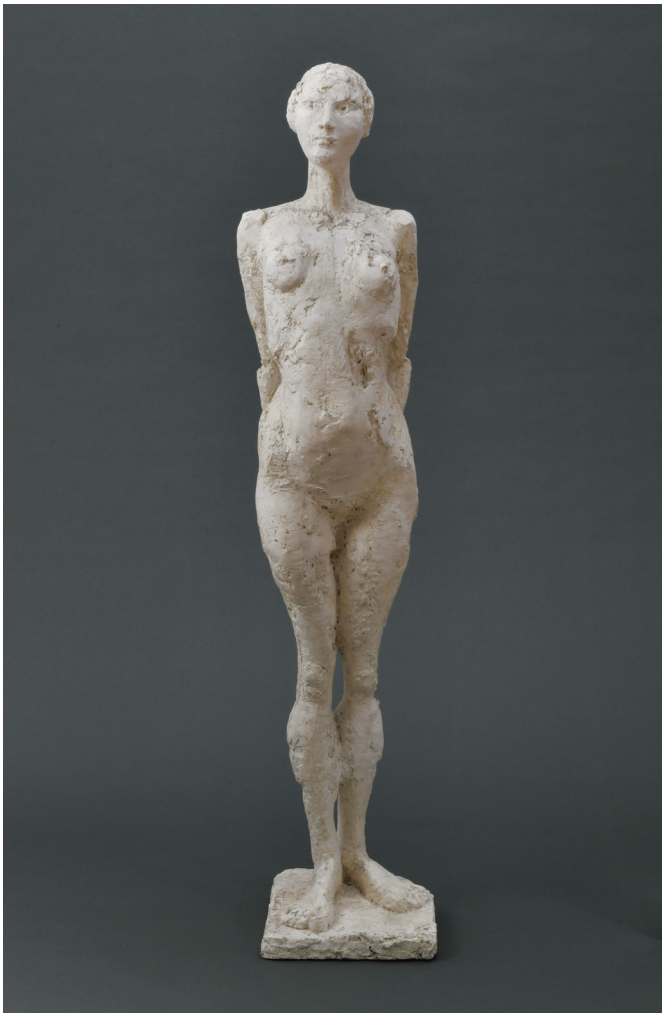
作品は残る。そして、作品は語り、伝える。その価値と、関わってきた人の歴史を。

「これまでの大学美術館のコレクション展では捉えてこなかった角度で作品を選んでみたいなと思っていた部分があったと思います。藝大のコレクションが他の美術館と違うのは、学生作品のアーカイブであること。つまりは、埋もれる過去を発掘できる記録性が最も大事。彫刻を志した女性の記録を表に出すことで、次の世代にこの国の芸術のはじまりの手がかりを残すことはできるのかな、と」

展示することは、時代に刻印すること

時代は移り変わり、小谷准教授が藝大美術学部彫刻科に入学した91（平成3）年には、女性は22名中8名。8年後の99年には20名のうち半数の10名、そして2017年には20名中13名と、ついに男女比が逆転する。

「今、学生を指導していても、男女の差は何も感じないですね。僕にとって今回、発見だったのは、こんなに早くから、彫刻科の教授陣が女性の作品を評価していたんだということ。近代彫刻は男社会だったので、その歴史の中心地だった藝大では評価してなかったのだろうなと、正直、疑っていました。でも、割合としては10パーセントくらいの女子学生の作品をフラットに見て、こうして買い上げ作品に選んでいたんだということが、違う角度から近代を考えるきっかけとなりました。そういう部分も、伝えておきたいです」



鷲崎直子《立像》1973年 石膏 高さ181.4cm

小谷准教授の発見には、さらに続きがあった。買上展で展示する5点に加えて、実はもう1点、同時代に買い上げられていた女性作家の作品が発見されたのである。

それは、70年作の池田カオルの作品。藝大美術学部に足を踏み入れたことのある人なら、いつか目に留めたことがあるかもしれない。美術学部中央棟1階の中庭的なスペースに長年展示されている石彫だ。

「コロナ禍になる前まではずっと、あの作品が見える部屋で教授会をやっていたんですよ。当時から『誰の、いつの作品だろう?』と気になってはいたんですが……」

静かに佇む作品の題名は《問》。作品と向き合い、彼女たちの存在感が私たちに問いかけるものについて、ひととき心を巡らせる。

「僕たちが作品を見ていたのではなく、実は作品が僕たちを見ていたのかもしれませんね」

PART 1

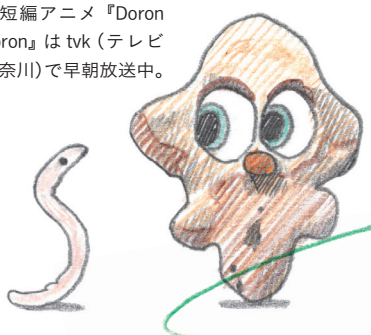
大学院映像研究科アニメーション専攻
伊藤有壱研究室

光を当て風を通し、作品と作者を育てていく

日本随一といわれる難関入試を突破し、この春、晴れて藝大生になった皆さま、おめでとうございます。そう、藝大の授業を受けるためには、本来、この高い高い壁を乗り越えなくてはならないのですよね。そんな場に6年もお邪魔している素人記者の私は、なんという果報者。というか、そろそろ藝大に授業料を払わねばならないのでは……。

もとい、実は藝大の授業や研究の内容は、限られた機会ではあるものの、実は参観することが可能なのです。ということで今回は大学院映像研究科、音楽学部音楽環境創造科が年に何度か開催している公開講座に潜入取材。どちらも参加費は無料でした。

まずは2022年12月、神奈川県横浜市にある藝大横浜キャンパスの一つ、馬



愛らしくも示唆に富んだ短編アニメ『Doron Coron』はtvk（テレビ神奈川）で早朝放送中。

授業SANKAN

ひらけ！　研究室編

大学院映像研究科アニメーション専攻
伊藤有壱研究室
＋
音楽学部音楽環境創造科
プロジェクトアートプロデュース
毛利嘉孝研究室

藝大の授業を、あなたもSANKANできる！
学生も教授もドキドキの「公開講座」に注目です。

挿絵＝小柳景義　文＝大谷道子



車道校舎へ。この日開催されるのが、大学院映像研究科アニメーション専攻が横浜市と共催する「OPEN INNOVATION」。08年の専攻設置以来、地域貢献事業として不定期で開催している公開講座の今回のタイトルは「人・環境・アニメーション〜創作世界と現実世界の相関〜」。人と環境というと、やはり社会的に関心の高いSDGs（環境問題、差別や貧困など人権に根ざした問題を協力して解決しよう！というムーブメント）の波がアニメーション界にも。全世界的な課題ですもんね。

「いや、正直なところを言うと、私自身はまだSDGsに懐疑的だったりするんです」

率直にこう語ったのは、アニメーション専攻の伊藤有壱教授。ご自身も数々の立体アニメーション作品を手がける第一線の作家が、今回の公開講座の企画者である。

「まずは自分が十分な理解に至っていないというのが第一の理由。そして環境だけでなくSDGsにはとにかくテーマが多く、そのどれかに接点がある作品はSDGsであるというくくられ方をするのも、個人で作品を制作するアーティストとしては腑に落ちにくく……。ですから、理解を深めるためにもまずは今回、こうした機会をつくって出合ってみましょうよという思いです」

プログラムによると、公開講座の前半は伊藤教授が環境をキーワードにセレクトした作品の上映。戦乱の続く時代に荒野で植樹を続けた寡黙な男の一生を描き1987年にアカデミー賞短編アニメ作品賞を受賞した『木を植えた男』（フレデリック・バック監督）と、種を内包した土の塊の愉快な旅を描いた伊藤教授による立体アニメ作品『Doron Coron』（2012年）、そして藝大の修了生・現役生の作品6本が用意されている。後半は、世界を舞台に発言する若き環境問題専門家を招いて学生・修了生とのトークセッション。この2本立てで「この社会の問題と自分が心血を注ぐ創作世界には、本当に接点があるのだろうか？」を問いかけるのが、教授の狙いだ。100席ほどの会場はほぼ満員。学生や学内関係者だけでなく年齢も属性もさまざま。この多様な観客を前に、いよいよ公開講座がスタートする。

『木を植えた男』と『Doron Coron』は、ある意味直接的に自然と循環にリーチした作品。続くアニメーション専攻の修了生・現役生の作品のテ



Eテレのクレイアニメ『ニャッキ！』の作者でもある伊藤教授。ハット姿とロングヘアは学内でもお馴染み。



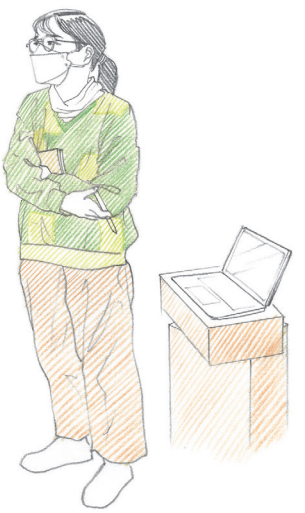
右上から時計回りに佐座さん、白石さん、多田さん、副島さん。アニメーションと社会の接点を真摯に探った。

ーマは、実に多岐にわたっていた。作者と同年代の女性の精神世界を描写したもの、滅びゆく時空間に息づく神秘の存在に目を凝らしたもの、戦争や災害のなかでも確かに息づく命の輝きをすくい取ったもの……数分間の短い映像のどれにも、作者の眼差しと切実な思いが凝縮されている。

「学生は自分でテーマを発見し、作品をつくり上げます。その自由度はとても尊重していて、基本的に企画への介入はしません」と伊藤教授。修士課程で学生は修了制作を含めて2本の作品を仕上げるが、テーマに自分自身の体験や心境が色濃く反映されるのは、学生作家の全世界的な傾向であるという。ときには辛い体験で受けた心の傷とも真剣に向き合う制作の過程に、教授陣は技術と経験、そして深い思いやりをもって寄り添う。

昨年暮れの某日、修了制作の追い込み段階を迎えた撮影スタジオを覗くと、一カット一カットに全神経を集中させての撮影が続けられていた。先生からの助言、立ち合ったゼミ生仲間からの、控えめながらも真摯な感想の言葉を受け、ひとりひとりが思考を研ぎ澄ませている様子が見て取れる。公開講座冒頭に「今日上演される作品には、SDGsを念頭に制作された作品は一作もありません」と伊藤教授が念押ししたのも、頷ける。切実な思いをもって世界と向き合った作品に





ゼミでのひとコマ。制作は個人作業なので、メンバーからの指摘は貴重な機会だ。

「SDGsなアニメーションです」というレッテルを簡単に貼りつけてしまうのは、いかにも乱暴だ。

それでも、学生たちが作品を通して向き合うそれぞれの問題には、やはりいやおうなく〝いま〟が滲んでいる。政治も社会も、人種やジェンダーなどのさまざまな課題も、彼らがいま、そしてこの先の人生で長く向き合っていくもの。もちろん環境問題もそのひとつで、講座後半のトークセッションに年上の識者ではなく同年代の専門家を学外から招いたのも「より身近な課題として考えるきっかけになれば」という伊藤教授の配慮から。

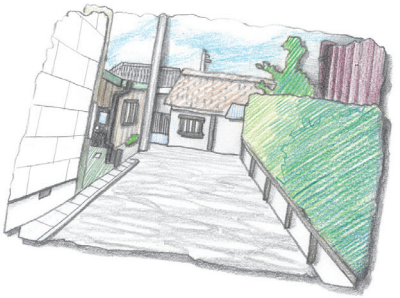
英国で大学院に学びつつCOP（国連気候変動枠組条約締約国会議）26の日本ユース代表を務めるなど世界を舞台に活動する佐座槙苗さんは27歳。環境問題に関心を持ったきっかけは小学生の頃に見た『もののけ姫』（1997年・宮崎駿監督）だというアニメーション・フレンドリーな世代だ。

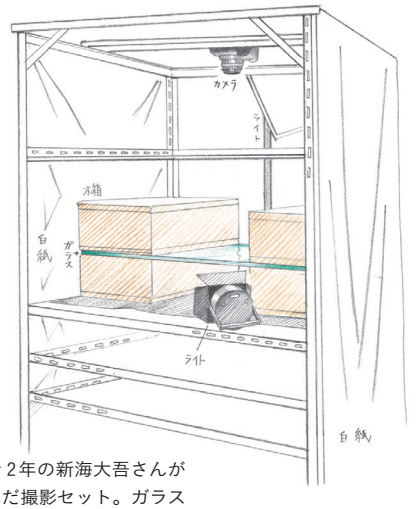
「皆さんの作品を拝見して、アニメーションは人の心を動かす力を秘めていることをあらためて実感しました」と佐座さん。物語をつくりながら、どうやって社会との接点を持ち続けるか。国内ではまだまだ低いSDGsへの理解は、現代社会に生きる人の心の問題を形にするアニメーションづくりで深められるのか。環境活動とクリエイティブの関係について、同年代ならではの率直な声がやり取りされ、観客がそれに聞き入る。

「一枚一枚を描いて時間をつくっていくアニメーションには、心や感情をテーマに作品をつくるときに欠かせない〝ゆらぎ〟の要素が表現しやすい」と実感を語ったのは、等身大の女性を主人公にした作品を制作した修士1年の多田あかりさん。「一人の感情に寄り添って内面を描き、個人の物語を丁寧に深めていくことによって、他者の問題、



水の表現を追求した新海さんの秘密兵器は透明なグルー（接着剤）。粘土製の背景には温かな手作り感が。





修士2年の新海大吾さんが組んだ撮影セット。ガラス板の下に背景を、上にキャラクターを重ねてコマ撮り。

もっと大きな背景にある社会の問題につながっていくんじゃないか」とは、物事の非永遠性をテーマに立体アニメに取り組む博士後期課程2年の副島しのぶさんの弁だ。唯一、修了生として参加したのは、身近な人の東日本大震災被災体験をベースに現実のなかに埋もれた真実を描き出す作品を修了制作とし、現在も被災地とつながりながら創作を続けるアニメーション作家・白石慶子さん。

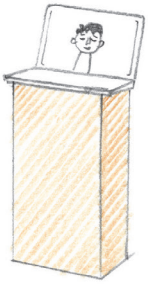
「アニメーションは、動かないものを動かして『アニマ（＝魂、精神。アニメーションの語源）』を吹き込む。命は人や自分だけでなく自然にも、そのほかいろんなものにも宿っているかもしれない……それを伝える作品づくりをしていきたい」という言葉が印象に残る。1時間のセッションは、「文化を変えられるのはアートの力だと信じています。皆さんがこれから何を発信し、観客がそれにどうアプローチするかによって、日本文化におけるSDGsがどれだけ実現できるかが変わってくるはず」という佐座さんの言葉と一同の笑顔、そして満場の拍手をもって締めくくられた。

「トライアルな公開講座でしたが、少しでも嘘のない場になればと思っていたので」と、終了後の伊藤教授もホッとした表情。作品を発表することは、いわば観客の心に種を蒔き、苗木を植える行為といえるだろう。一人一人の作家が精魂込めて育てた一作一作が、見た人のなかでどのように育っていくか……公開講座は、観客の心を、ひいては社会を耕すための機会にもなりうる。

「そうですね。だから、生み出したアニマは、こうやってちゃんと外の光に当てて、風を吹かせて、成長を見届けなきゃ……そこまでが制作ということなんだろうな、と思います」



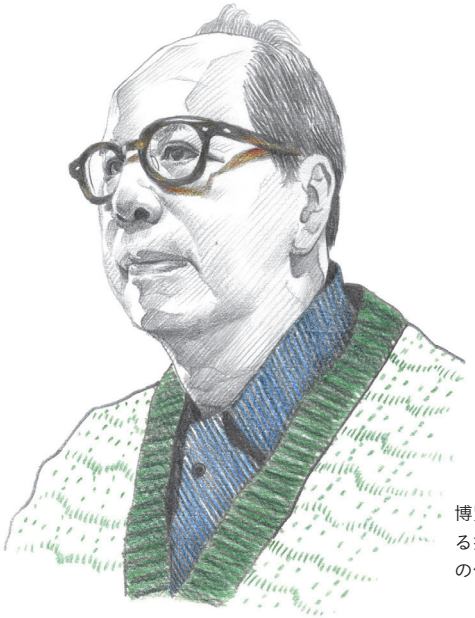
学生が制作した作品は「GEIDAI ANIMATION」公式YouTube・Vimeoで公開中。作者と時代の息吹に触れてほしい。



PART 2

音楽学部音楽環境創造科
プロジェクトアートプロデュース
毛利嘉孝研究室

「超現代」をゆく はみ出し者よ、ここに集え



博覧強記にして愛情あふれる指導で学生たちから全幅の信頼を置かれる毛利教授。

さて、次にやってきたのは東京・足立区にある千住キャンパス。2022年12月上旬、普段は授業が行われない土日にもかかわらず、校舎内は活気に満ちていた。この両日は「千住 Art Path 2022」と題されたイベント期間。音楽学部音楽環境創造科（略して「音環」）と大学院音楽研究科音楽文化学専攻音楽音響創造分野による、年に1度の研究発表会の日なのである。

各部屋を覗くと、展示あり、インスタレーションの作品あり……音環らしくさまざまなタイプの音楽、音声も響いてくる賑々（にぎにぎ）しさ。入ってすぐのホールでは、ラジオブースのようなセットでトークが繰り広げられている。本日見学するのは、音環のプロジェクトアートプロデュースの毛利嘉孝研究室による公開発表。藝大で行われているゼミを見学、体感できる貴重な機会だ。

「ポピュラー音楽と現代文化を研究すること・実践すること」という講座のポリシーどおり、ここは藝大には珍しい社会学系の研究室。担当の毛利嘉孝教授は、経済学部の出身ながら人文一般、社会科学、アート、音楽と幅広いジャンルで縦横無尽の研究、評論活動を行うことで知られている。2日間で8人の研究発表が行われる会場となる教室の席に着くと、すでに在校生と思われる学生たちを中心に聴講希望者が集まっていた。

最初の発表テーマは「ソーシャルメディアにおける音楽の聴かれ方・広まり方」。体調の関係で発表者がリモート参加というのも、当世風だ。SNS、とくに動画共有アプリのTikTokがいかに近年のヒットチャートに影響を及ぼしてきたか





研究発表の一環として自身のYouTubeチャンネルの番組収録を行った学部3年の遠入夏希さん（左）。「藝大を横断し、違う才能を持つ人と交流を深めたい」と語る。



レジュメもプレゼンの構成力も社会人なみのゼミ生たち。社会でも即戦力になりそう。





「カチューシャの唄」はなぜ流行したか

好きな劇場の名前を教えてください

1位　日生劇場　189票

について、スクリーンに映し出されたレジュメをもとにプレゼンテーションが始まる。

「まずはじめに、このアプリの特徴と使い方からご紹介します」。発表者の丁寧な説明により、はじめて知るTikTokの仕組み（私だけかも）。へえ、こうやるのね、え、こんな使い方もできるんだ……ともはや当たり前すぎて誰にも聞けないことが普通に勉強になる……のが目的ではなく、ヒットチャートとは違う音楽の伝播方法が、要点を押さえた解説でわかりやすく伝えられる。

聞くところによると、音環は入試の面接にプレゼンテーションの課題があり、入学した時点で学生たちはある程度のスキルをすでに身につけているとのこと。加えて、それぞれがテーマを決めて研究を深めるゼミが1年次から必修なので、つまり藝大一〝発表慣れ〟した学生たちなのだ。発表が拍手で締めくくられると、毛利教授の講評が行われ、研究を深めるポイントが示される。

音環だけに、やはり音楽専門かと思いきや、次のテーマは「観客にとって理想の劇場とは」。発表者は年に100本近くのミュージカルを観劇する舞台フリークで、大好きな演目が設備のよくない劇場のせいで台無しになってしまった経験をもとにテーマを設定し、ウェブアンケートなどを使って観劇愛好者の意見などを収集したという。

「そんなにひどい劇場があるの？　そこを褒めている人はいないの？」毛利教授の問いに「たぶん一人もいません！」と断言（愛ゆえの強さ）。好きが高じての熱意に水を差すことなく、教授は調査の仕方、研究をブラッシュアップする切り口などを丁寧にアドバイスする。アニメーション専攻の伊藤ゼミもそうだが、藝大、本当に教授陣の寛容な伴走ぶりがすばらしいのです。

後半2本の発表はいずれも音楽ジャンルのテーマではあったが、1本は大正期の流行歌「カチューシャの唄」（この回、年配の観客多め）、もう1本は、昨今再生の際に飛ばされがちだと噂の〝ギターソロ〟の歴史研究というランダムぶり。小唄とロックが脳内でハレーションを起こしかけたところで休憩時間を迎えると、「こんな感じなんですが、大丈夫ですか？」と毛利教授から声が。

「指導方針は、完全に『放牧』です（笑）。テーマがいろいろで進め方についても個人差が大きいですが、年に1度は必ずここで30分くらいのプレゼンテーションをすることが共通課題としてあって。普段は仲間たちと話すことが多いけど、こうやって外部の方に聞いてもらうのは、いい訓練になりますね。あとは年明けに、音環の教授陣の前でそれぞれ研究報告を行います」

その準備のためのゼミ授業、後日、見学させて



ボカロPゆえ実像はご容赦を、の鮎川氏。4月からは藝大でも講座がスタート！

もらいました。ここで聴講したテーマがまた、さらに多種多様。若者たちが日々カジュアルに口にする「死にたい」は、本当に希死念慮の告白なのか？を追究する「『死にたい』の解読」や、「YouTubeチャンネルでの発信と対話を通じて自己表現の在り方を考える」（公開講座の日、行われていた配信はこの研究の一環だった）、はたまた、アメリカンコミックの祭典の歴史と立ち位置を考察したり、漫画動画の未来について考えたり……この超ランダムなテーマすべてに的確にコメントできる毛利教授って聖徳太子さまですか？学生たちも「何でも受け止めてもらえる、藝大一自由なゼミ」「はみ出し者に優しい」と居心地を絶賛。研究室の風通しのよさが窺える。

ただし、1年から4年まで同じテーマで研究を行う学生は少なめ。なぜなら「扱うモチーフが〝超現代〟だから」と、毛利教授。

「同時代的なメディアの研究って、そういうものなんですよ。僕にしたって、何かについて書いている最中に、気がついたらそのブームが過ぎ去っていたりする（笑）。藝大には、比較的ゆっくりした芸術文化を扱う学科が多いですが、ここのように現代を扱えば変わっていくのはしょうがない。でも、たとえ次から次に葬り去られるとしても、また新しいテーマを見つけて、それを調べて形にする能力は確実につく。最終的には、それが各人の蓄積になっていくので」



公開講座の日に戻ると、学生の発表後には、特別ゲストにボカロP（歌声合成技術によってつくられた音楽ジャンル、ボーカロイドのプロデューサー）で音楽評論家として活躍する鮎川ぱてさんを招いてのトークセッションが開催された。大学院美術研究科先端芸術表現専攻を修了した元藝大生でもある鮎川さんは現在、東京大学教養学部で「ボーカロイド音楽論」を担当、その講義の様子を伝える著書が話題を呼んでいる研究者である。

性別を感じさせない音声によるボーカロイドの根幹にあるのは「アンチ・セクシュアル」（＝性的であることを自明としない感性）であると鮎川さん。その命題を巡って毛利教授と対話したのち、



学部ゼミは全12名。フレンドリーな空気ながら、発表内容については鋭いツッコミも。

学生含む観客と鮎川さんとの質疑応答がスタートした。「ボーカロイドとVtuber（ネットメディアなどで活動するキャラクター。性を誇張した表現を伴う場合も）の棲み分けとは？」「なぜ藝大にはジェンダーやセクシュアリティの講義がないのか」など、討議と意見交換が活発に行われた。さらに、音環受験を志しているという高校生参加者（会場にあふれるウェルカム感！）からの質問も相次ぎ、時間ぎりぎりまでの大盛況に。大学とは、学びとは、という固定観念を軽々と飛び越え、まさに〝超現代〟に開かれた場の活気がたぎっていた。

「一点突破型の人もいるし、横断型でいろんなことをやっていくタイプもいる。だからうちの研究室では、学生に何を提供するかというより、むしろ学生に合わせてどう動くか……。『こういうことをやりたいんだけど、どうしたらできますか？』という声に、藝大の持つ資源を使いながら応えられるといいな、と。いろんな意味で、すごく多様な資源を秘めている学校なので」と毛利教授。大学は学びの場であると同時に、個々が研究を深める場。そして、研究の要になるのは、道を踏み外しても踏み外しても立ち上がる、強い意志だ。

学生たちの興味関心を育て、さらに高く広く羽ばたかせるためにも、外へ外へと開いていくことが、これからの研究環境には必須。この「授業SANKAN」も及ばずながらその一助になれば……ということで、編集長F先生、私はまだ授業料を払わなくても大丈夫ですよね？





ヨーロッパ・アジア諸国からの留学生が半数近くを占めるワールドワイドな大学院ゼミ。日本語・英語を交互に繰り出す講義は圧巻！



お知らせ

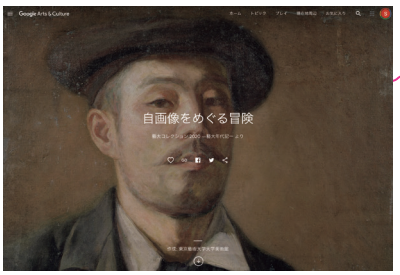
今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

藝大生がつくる「買上」ショートムービー公開中
再生回数が多かった作品を大学美術館が買い上げ

今回本誌で特集している東京藝術大学大学美術館の『買上展』藝大コレクション展2023。3月31日～5月7日に開催される本展では広報企画として、本学在学生から広報動画を募集、公開しています。

藝大生それぞれが思う「買上」について、自由な発想で15秒のショートムービーを制作してもらい、大学美術館の公式Twitterおよび YouTubeで紹介（3月20日の一斉公開後の応募も受け付けています）。そして、4月28日12時の時点で再生回数が最も多かった作品を10万円、2番目に多かった作品を5万円で大学美術館が買い上げます。読者のみなさまもぜひTwitterおよびYouTubeで再生してみてください。

詳しくはこちらから



Google Arts & Culture の大学美術館のページで展開されているオンライン展示より

大学美術館がGoogle Arts & Cultureに参加
収蔵品の一部がオンラインで見られるように

大学美術館は2022年11月より、Google が提供する Google Arts & Culture にて、収蔵品131件の高解像度画像のオンライン公開を開始しました。Google Arts & Culture は、11年からGoogle が非営利で提供を開始した、2000を超える世界各地の美術館や博物館などが所蔵する作品や文化遺産を鑑賞できるサービスです。ブラウザやアプリから大学美術館のページにアクセスすることで、《絵因果経（えいんがきょう）》（8世紀後半、国宝）や狩野芳崖《悲母観音》（1888年、重要文化財）といった国指定文化財から、歴代の卒業生による自画像や近年納入された学生制作品まで、さまざまな時代・分野にわたる収蔵品の高解像度画像を作品解説とともにご覧いただけます。

Google Arts & Culture の大学美術館のページ



20名超の作家による
藝大アートプラザの『藝大密林化計画』展

藝大上野キャンパス構内にある、アーティストの作品が買えるギャラリー・藝大アートプラザでは、『GEIDAI ART JUNGLE returns 藝大密林化計画』展を5月28日まで開催中です。アーティストたちが創り出すさまざまな生き物たちで藝大アートプラザを「アートのジャングル」にしてしまおうという企画展です。想像を超えたアートの密林をお存分にお楽しみください。6～7月は『藝大神話―GEISHIN』展を開催。入場は無料です。

詳しくはこちらから

大学美術館（上野）の展覧会

本館

『買上展』
藝大コレクション展2023
3月31日～5月7日



台東区コレクション展　文化・芸術の杜 上野を巣立った芸術家たち
6月17日～7月9日

林武史退任記念展
9月30日～10月15日

陳列館

Glitches in Love: A New Formula/愛のグリッチ：新しい公式
3月24日～4月9日

解／拆邊界―インターアジアにおける木版画実践（仮）
4月29日～5月8日

ワンス・アポン・ナウ 1873-2023
―ウィーン万国博覧会150周年・日墺文化交流記念事業
5月16日～6月11日

日本画第二研究室 素描展
6月17日～6月29日
※最終日は12時まで

工芸総合演習2023
『私の工芸―触れる工芸・観る工芸―』
7月14～19日（予定）

あなたのアートを誰に見せますか？
8月8～27日（予定）


陳列館

日本画第一研究室 研究発表展
9月1～13日
※正木記念館でも展示あり

うるしのかたち展2023
9月16日～10月1日

奏楽堂（上野）の演奏会

藝大フィル定期第415回
4月20日
19時
4000円

同声会新人演奏会2023
4月22日・23日
各14時
各2000円

モーニング・コンサート1
5月11日
11時
1500円

藝大フィル定期第416回
新卒業生紹介演奏会
5月20日
15時
3000円

管打楽器シリーズ2023
5月21日
14時
一般 3000円
高校生以下 1000円

五芸祭合同コンサート
5月28日
14時
無料
問い合わせ：学生課
☎050-5525-2068

創造の杜2023
6月2日
19時
3000円

モーニング・コンサート2
6月8日
11時
1500円

シンフォニーオケ定期第67回（藝大フィル定期第417回）
6月8日
19時
一般 2500円
高校生以下 500円

弦楽シリーズ2023

ヴィオラの真髄
6月10日
15時
3000円

藝大チェンバーオケ定期第41回
6月17日
15時
2500円

モーニング・コンサート3
6月22日
11時
1500円

モーニング・コンサート4
6月29日
11時
1500円

藝大第九 チャリティコンサート vol.7
7月2日
15時
5000円

モーニング・コンサート5
7月6日
11時
1500円

ウィンドオケ定期第95回
7月12日
19時
一般2500円
高校生以下500円

モーニング・コンサート6
7月20日
11時
1500円

シンフォニーオケ プロムナードコンサート16
7月20日
19時
一般2500円
高校生以下500円

モーニング・コンサート7
7月27日
11時
1500円

和楽の美
「源氏物語」夕顔・須磨の巻
7月30日
15時
S席5000円
A席4000円

アカンサス音楽祭（室内楽）
8月26日
14時
料金未定

アカンサス音楽祭（オーケストラ）
8月27日
15時
料金未定


奏楽堂

モーニング・コンサート8
8月31日
11時
1500円

モーニング・コンサート9
9月7日
11時
1500円

ジャズ in 藝大 2023
9月9日
15時
5000円

＊全ての公演で全席指定、当日券発売なし
＊展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト（https://www.geidai.ac.jp/）をご覧ください。
＊展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学美術館
☎050-5541-8600
（ハローダイヤル）
＊演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学演奏藝術センター
☎050-5525-2300
＊演奏会チケットの取り扱い
ヴォートル・チケットセンター
☎03-5355-1280
チケットぴあ
https://t.pia.jp/
東京文化会館チケットサービス
☎03-5685-0650
イープラス
https://eplus.jp/
藝大アートプラザ（店頭販売のみ）
☎050-5525-2102

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜り、深謝申し上げます。本号では、2022年10月から2023年1月までに寄附をいただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます（掲載をご承諾された方のみ）。

［個人の皆様］

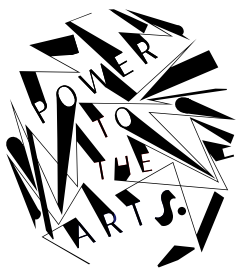
河原茂晴様　30万円
佐橋俊彦様　30万円
田尻比呂子様　5万円
廣田和美様　5万円
米澤武史様　5万円
秋葉弘実様　4万円
片岡操様　3万円
藤本昌志様・祐三子様　3万円
田中秀幸様　2万円
伊藤公一様　1万円
上田武夫様　1万円
北修爾様　1万円
小林秀夫様　1万円
髙梨紀代美様　1万円
徳住光則様　1万円
中村篤様　1万円
福田典子様　1万円
村山則子様　1万円
秋山境様　5000円
圓山雄太朗様　4000円
直井小百合様　1000円
青柳美智代様
青山夏実様
石橋宗弥様
井上朋子様
宇佐美敏男様
大川聡様
小出裕美様
小林裕之様
坂口悰治朗様
島野聖章様
清水晴雄様
酒々井夏子様
髙橋和美様
高橋まどか様
滝沢健作様
夏野めぐみ様
増子佳世様
門馬浩様
山縣宏人様

［法人の皆様］

株式会社平成建設様　300万円
シルクロード文庫運営合同会社様　200万円
株式会社DO様　60万円
モッカカンパニ合同会社様

○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実施と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いします。



藝大生に緊急の支援を。若手芸術家に活躍の場を。
「若手芸術家支援基金」

東京藝術大学基金へのご寄附は、新型コロナウイルス感染症により、展覧会や音楽会の中止などで影響を受けている在学生および本学出身の若手芸術家を支援する「若手芸術家支援基金」の原資となります。そして「若手芸術家支援基金」では、在学生への修学支援、学生などが開催する展覧会・演奏会への助成といった応援プロジェクトを実施しています。

お問い合わせ
社会連携課渉外企画係　☎050-5525-2400　藝大基金ウェブサイト https://fund.geidai.ac.jp/